石城志　五

1001
4

国立国会図書館　　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用

石城志巻之五

佛寺部下目録

龍宮寺
正定寺
妙音寺
法性寺
本長寺
本岳寺
天福寺
大乗寺
明光寺
妙典寺
本興寺
宗玖寺

帝國圖書館藏

鶴田藏書

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用

入定寺
報光寺
観音寺
一行寺
栄昌庵
多福房
万行寺
順正寺
覚永寺
妙静寺
行願寺
成就院
日水庵
光西寺
大念仏
附録

東林寺
西方寺
海元寺
選擇寺
順弘庵
寿福庵
妙行寺
善照寺
西教寺
光泉寺
本願院
禅護寺
真空庵
一[illegible]

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

崇福寺　　自性院
廃寺
圓龍寺　　開松院
古墳
濡衣　　盧光明
謝国明　　秀海
妓女明月

石城志巻之五

津田元顧　校定
男　元貫　編録

佛寺下

龍宮寺　浄土宗鎮西派智恩院末、号冥眼院、在東長寺北

冷泉山と号す。開山谷阿上人と云。開基の年号詳ならず。

此僧　四條院仁治二年に遷化す。寺ハ[illegible]

此寺始ハ浮御堂と云。寺号を龍宮寺と改めし事ハ

帝国図書館蔵
鴻田蔵書
国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

貞應元年四月十四日博多の海より人魚を捕得たり
此由 朝廷後堀川院へ奏聞しければ勅使として冷
泉中納言下向ありて勘へ此寺に居住ありて其時安
部大富といふ古の博士人魚出現の事を占ひ国家
長久の瑞兆なりと奏しける故に人魚をハ此寺の中に埋たまひ
て後あらためて龍宮寺と号す 此魚人に似て海
中より出たれハ龍宮より来れるものとハいふ意也又
冷泉山と号せしハ冷泉中納言此寺に逗留せられしき

しるしなりと云 正徳之風土記 今按に近年寺内よりあやしき
枯骨を堀出して人魚骨なるへしといひてもてはやし又
又人魚を埋たりし所とて石碑を建てさるもありと云へり
而後世の附会なるへし 又博多記に此寺むかしハ西町
の北側にありて今揚地の社ある所と云 按に西町辺ハ
むかし入海ありし所なといへハ此説覚束なし 又云
此寺ハ四條院仁治二年善阿といへる時宗の僧建
立といへり 此説古き説 今按遺にもいへり

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

一 文明十二庚子の年宗祇法師西国ゟ下り博多
ニ於て居をむすひし此寺ニ客寓せり九月二十
七日当寺ニて連歌百韻興行あり世ニ博多百
韻と云

帰みぬ松のこのまの凉風　宗祇
霧ニ志るし浪のをとさやさ　空吟
月清く夜舟乃上ニ一鳴て　弘相
蘆ニかくるゝ床のあさつき　朝酉
峰さえハ遠くかゝりて音きめや　英誉
山ハ川こえし夕されの声　岸彦
そこともわき鐘や意ニ請るらし　宗歓
嵐ハ今そ声も長閑し　宗賀

下略之

宗吟ハ竜宮寺住持　弘相ハ津役日屋敷ニ津役といふものハ寺社の司あり寺一大内家
の臣なり　宗歓又名宗長　宗賀西人とても宗祇
傍友の人なり　朝酉住主
此歌右の本書近きころまて伝りしか享保十七壬

子年六月十八日乃夜此寺焼亡せし時一灰燼と
なりしハいと惜むへし

一 当寺の正観音ハ慈覚大師の作にて霊験多し七
観音乃内なり

一 寺内ニ荒神あり行基の作と云二月二十八日庚
申商売の繁昌ニ参礼乃もの素銭を賽をなす毎月
二十八日縁日乃人多し

天福寺 禅宗麻布下 広尾祥福寺

萬寿山と号せり人王八十六代四條院天福元年乃
草創にて開山高湯和尚剃年号を以て寺号とせり
今猶に九年号を以て寺号となせるハ勅許ありしものにや 延暦寺叡山 建長寺鎌倉 寛永寺江戸 永久寺和州 修禅寺の類之紀ハ当寺と
然ハ官寺なりしにや 初ハ東長寺の北隣にありしが 忠之之の比
座頭か封をする時公命ニ例の三童官寺の三枚内乃関東
町人共の素性ニ表ハ赤洞三尺五寸乃代地を賜りて今
乃地ニ移されしめくる当寺ニ正観音の銅像あり
天空より感ありしと云又地蔵帯乃中子あり

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

正定寺 浄土宗

見佛山と号す　智恩院の末寺也　開山ハ感誉上人
なり　後土御門院明応年中に開基せり　感誉ハ
筑後国善導寺十七代の住持也　其初めは防州大
内義興の母正定院と云ふ人　感誉に帰依し寺
領を寄附せられしによりて正定寺と号す　初ハ濱の
土居にありしか　今ハ一通りに移し　此寺の什物に恵心僧
都の書給ふ曼多羅あり　其絵図乃精密なる事　世に
又類なきものなりといふ　三傳 續風土記　此寺もとハ表粕屋三
花村にあり　後又博多奈良屋町南側に移る　博多記
今ある所ハ此寺今ハ三町上呉服町側にうつりしハ何の比
にか移りしまゝ　寿房元禄十三年九月十六日海元寺
より出火して当寺も類焼せり　此時彼恵心の曼
多羅も焼失せり　今乃精舎ハ其後の造立也

大長寺 真言宗 号宝珠院と

法皇山と号す　昔は律宗にて西大寺の末寺也

亀山法皇の勅願寺之故ニ法皇山の号あり [illegible]保
八年乃比より浄土宗となりぬ 正保元年国君
忠之公之政ありて真言宗となしぬ 本堂ニハ弘法大
師乃作千手観音之作物ニ宝珠ありて玉之纏りて
寸三分ありこの宝珠ハ両本ニ於てハ錦かくへし 西宝
嵯峨二尊院乃玉なと同日の談なるへし 続風土記

一 上宮捨遺物也川ニ流るニ古き夫さくら志希なとて
そのあるらる二の池あるなる右停の古き夫のりまけれ

社父之長さく志なる一京よりかくらるの時二度人ニあひ
六七子足之の尼と傍ニ之て太刀十腰帯て二京
ニ上りける西帰りニ淀ニて さりく志希の舎人あて
て乃土の一足ととのりかゝるか十五水干ニかへしり修
ニ下りて度人ニとそれハ先ニ七拾歩の傍ニ立
ゑるし太刀とて以十かこのと出して後玉ニかハる
りとえて又云侭ならニゑるうしさらずとりなその
あるらその物を清ける店ニ乃て五まみをとしニつく

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

名玉のやうきんじやうもあるいさ経紙絹二十疋
に換へんとしけれバ六千疋に買へと唐人戻りけれバ綾
五千疋に加へてけり此價五万貫なりしと云ふ 太宰
佐枩廣遠十四巻に委し此説にまけたりと其趣
云ひ合り全文いと用ゐがしたれバ是を略す されバ玉の
價ハかぎりなきものといへし 此寺の宝珠ハ唐土
人に見せなバめでたき宝ぬべし 今此説に表出
し侍るハ教言(ぜいげん)に似たれども是ぞ亦博多にかく
まつる 物のかぎりなきハ始(ミハラク)まるへし 逆侍るのを

忠之公より 東照権現の御神像を此寺に安置し
のち毎月十七日に祭禮あり 神像ハ狩野探幽図之 寺産而
石高附あり 大猷院君の御夢想の御法楽と
此寺にて行ハる 荒戸山に 東照宮乃神祠を創立
ありしハ此後の事也 此寺乃鎮守ハ弘法の作にて增
多七鎮守の内之

妙音寺 天台宗属延暦寺 号梅照院

除江山と号す本尊ハ正観音之唐土より渡りしもの

いにしへは博多七観音の内也開基并年不知天正年
中大友がし龍造寺と戦ひて博多ことごとく放火せしりけるに此寺
の堂舎も残らず焼亡しぬ近代住持なくして尼
寺となりしが 志云 櫛田社のうしろ片原町に庵
所建此寺に居たりし尼が如しこゝに移して又書る
本は真言宗にて住持となりしが後めに寛延二年九
月寺を三位田宗に附して天台宗となしけるとぞ 続風土記
さしめは妙道禅尼寺といひて第二天寺の末乃比丘尼寺

なりしとぞ〈此下に傍成村云々説あり今略す〉一説に妙楽寺開山月堂和
尚の母尼となりて此寺に住せしと云此寺の庭
にしげるは貞久といふ尼也 志云 太宰府花台院
坊の住持良満と云僧に当寺を預けり天台宗となる
し寺産四十石を寄附して祈禱寺とせしめ良満
後に原光院の住職となりぬそれより又此寺の観音は廣船
博多に来りし比持渡りたるを当寺に安置せしとき
臺坐の中にむかしの施主の名ありと云貞久の建立

もし寺なり二世言長殿にて居る元禄十年に解山而して
今乃観音堂に建ハかへりとぞ　博多寺院全遺

明光寺　曹洞宗豊前泉福寺末

大宝山と号す寺町にあり開山ハ無轄純和尚と云開
基の時代拝ありを記世の時裏廃して小庵のミ
残りしを寛文十年國君　忠之公の御命に依て
再興ありし時乃住持なり生雁宗此和尚とりく金
乃人と初め遍参の時にて仏にあらしなり　忠之公の生母
大涼院君のしよせしき常に剃髪の志に侍りける
此居大志ありなり　大涼院君ありのみのれ此年に
て空しくなり給ふ日なり居るに本寺に那古今より
遊学して功あり而ハ風前に訪り一寺を建立てな
先父母の為に供養でよとて　先考保科禅定忠正
直乃遺骨及び先妣長之院殿の落髪なりあるへて
この下乃剃髪せしと称り良役にて同せしに埋て
是へしと称しのみ遊学の贈をして豊前全土十五

御師に日蓮宗の命を受て諍しより曹洞の禅に入而
祥学して一舎州沖の法味を嘗(ナメ)後 大源院君
より帰りし其金を以仏寺建立の事を行へと以て
費(ツイヤ)をなして学業成就して帰郷の後寺を建立して
一寺の開基とせんとせし 正明寺也 此寺は日蓮宗長円寺を建立せしが後寺の号に譲る也 正明寺
破壊に及びしを再興すへしと企る所に国君 是を
甚其志を感じ給ひ白銀材木等を御寄附 興福院君
太原院君よりも各白銀を施し其外の寄付もありて
明光寺再興成就なり 利正直 法名建福院天淵慶公大居士 同夫人
法名長源院授法大姉 乃墳を建 大源院君逝去の後御薙
髪を同所にて並へ住し墳を立て各一壇を構へ位牌
を置る也 保科正直は 忠之公の外祖父なる故 忠之公
より寺産五十石寄附しのみ今に至りて是のり 續風
土記 此寺むかしは寺町に表門ありて今の表門ある所は
正徳年中住持鉄相和尚東町の人家を買て寺内
とし客殿金厨庫門並に門を建立ありし故東

町の表門にて此鐘相ハ名高き能書にて清拙（チンテウセツ）の筆
也承天寺東にあり又当寺よりは筑前總持寺の輪
番なりとも

法性寺 日蓮宗京都 本法寺末

修岳山成教院と云寺町の東側にあり人王百二代
称光院応永年中日親上人開基なり此宗旅
前国中に法華宗最初の寺也日親上人弟子あり
他宗よりも此宗信して当宗寺院之又当寺の住
持ハ代々上人住す轉りありし処一小路町上書東側に
あり今ハ今水氏の菩提所なり

妙典寺 同宗本寺 同上

松林山円珠院と云寺町にありしを後柳川
ありし寺と云後本州御笠郡三苫村に移り其後寺
秋月に移りしを寛永三年此所に移る也是より寺地
狩野勘解由の田宅（ホノケ）に寄附すと云慶長八年四月二十五日
此寺の住僧日来と申す日宗乃僧と法論して敗れたり

故福岡に新に寺地を撰り一寺を創立して勝立寺
と名付く 博多記十一巻寉田作合せたる 集

本長寺 日宗本寺 同上

松濤山受信院と号す むかしは此寺今魚町にあり
しと云 今は寺町にあり 大友宗麟より粕屋郡別府
邑を寄附す 今も拾五町宗行の文書あり 再朝鮮の事文を
といふ事の博多に来りし時書寺乃記を書り今
に傳はれり

本興寺 日宗本寺同上

龍宮山と号す 寺町にあり むかしは古門戸町にあ
りしとかや 今乃所に移りて此寺の開基は臣本
国長とて怡土郡高祖村の人也 故に寺号とせり

本岳寺 日宗本山同上

西昌山正福院と云 寺町にあり いにしへの時の開基
まで未詳 或は浜に云初めは上呉服町に本興寺として禅
宗の寺あり 或時西昌といふ僧京師より来れるに

日円といふ長老の僧を賭(かけ)に秦の国にして西昌に約し
て云此扁額(かくがく)ハ此寺にあるへしとて輸(ゆ)るかハ其の後のよしをもて
へしと書のうちに日円終に勝ちし故此寺を日蓮宗
に改め先住の名を用ひて西蓮山本覚寺と号す其
住しける人の天正十七年に遷化せりと云其後元和
のころ今の地に移せり今の仏像ハ浅倉家より寄
者建立之此寺に慶西乃釈迦誕生会の一軸あり
高さ二尺許居延の筆なりといふ是ハ至福寺の

什物かりしるしのや

宗玖寺 同宗法性寺末

栄昌山と号す片土座町にあり此寺に蕃ありて
金厨(ちう)子一つありしかハ祐円の子息雲氏法性寺の檀家
なりしにより宝暦乃山田椿峯の玄なりしへこれを寄せ
庵のなかの某の仟にてなりぬへしこれを後へりしより
今に至りて詣てまゐり求むる者多しといふ
開基の時代ハ元和の比なるへし 市村宗玖と云人住せし

むかりしのや

入定寺　真言宗末
　　　　東長寺

寺町東側にあり松見山　今按に寺鑑并博多記等作宝寿山
自性院といふ其初めは何の時よりか有けん住持もなくかたちのみある艸庵なりしを長政公建立して寺として開山は長政公の臣黒田美作一成の伯父唯心院圓心と云ふ人は播州の人にて十七才より出家し參州に住して一寺の住持となる　東照宮其人をしろしめし

の後寺を出て所々修行しけるが後此博多に来りしが不遇しける後豊州安岐郡野中の唯心院の住持となりける　長政公筑前を領せられし時其住所にて俗縁ありけるにて　東照宮より度々御使給ひし此国に来りて後下座郡三奈木の邑に一寺を建立して博多に来り今の入定寺の地に居りし草庵営み入て住り家臣此所にて入定すへきよしを長政公に再三請けるを後に始めは許されなかりける

くも終に冬しける程より二七日断食して其後座に
合掌三昧の而り居つゝ左て居る長十三年八月十八日夕の
如くかしこまり寂しぬ是年七十八入定の洞　長政公被差
来りのへし何事にてもと仰あくへし其主へ一と宣ひ
それは念仏所此世に留り人は往生後に此詞に仏前
御庭にてしのはれのしとゝしつゝまよりて年経て
円心の入定しりたる詞に長政公より仏前御庭の上
加藤内匠奉り之　此所草堂の地狭小なりし故近辺の町を除

罗居て寺内にて仏堂は元和七年に再能を為さしの
入定しける地をむきはらて寺号を入定寺と定めの
建寺江月和尚に請て寺号を書しめ仏堂の扁額
とせり此寺山号を松見山と名付し院号は無量よ
りて自性院と号す念仏の石体の地蔵に作りて寺の
本尊とせし　長政公より寺三石十石を附しのち
光之公迄生の後寺料を減らし　毎月寺へ来たる
武運長久乃祈禱を當へきよし　光之公より命し

のみ其料として毎月廿八日の夜寄合て念仏に
扨て絶たる此寺の内に昔蓮池あり故に都て此辺を
蓮池町と云 續風土記

元和四年午八月朔日西ノ年此の法会黒田長政
一照院に詣らせしむ又二夜の念仏修して其後に目をとぢと云 今按
慶長十三年入定ありしより考ふ時は寛永五年に当る
のとし 西ノ年に当るを 又長政卒去は元和九年八月十
八日なれは入定せしと云其年の事は寛保三亥年西ノ年
にあたる 元和四年より以て西ノ年とあるは元和
三年の入定と思へし

東林寺 曹洞宗加州大乗寺末

瑞鳳山と号す 大会寺門にあり 開基は明光禅寺續
峯の舎下 祖泉之 光之公の家臣三苑主根 或作乾
祖泉より分れて 元禄九年丙子年新立せしむ 東林寺
ハ宗像 夜須郡四田根田村に在て今の寺其寺号を廃してはしめ
へ上にて近世に廃絶せしを元禄三年鎌田昌生に建立す

力なり加州今枝の首座長尾は寺号なきを惜て禅忠に
伝へて禅忠初めて寺基を営て終に両三年に一寺
落成す聖之年丁丑前住大乗の石山和尚を招待し
八月二十六日入院 先之云 偶政元に致て石山を東林
寺の開山として一臈住持でしむ 此時十月廿三日
先之云 郭遊の後日東林の南門より入禅寺前を経
過し近侍乃士を以て三重塔安置の字禅寺の字
未一元潤のみ寺門の栄華と称す石山も寺の書記

東林禅館に宿りたる 赤 安邦君に致て加州大乗
寺の直末寺とす 大乗は日本曹洞宗の祖庭道元禅師の高
弟徹通義介和尚開山の地也 越前の永平寺は並ひ
て洞宗の大本寺なり 石山前住乃跡に依て之 石山
瑩春回錫に及ふ 法嗣信光長尾 退光此時長法寺の住持なり 或
東林の二世として元禄十六年 癸未 退光安長宗に移る
其後前住能州東嶺乾光之 真長尾を譲りして
第三世とする 石山の言を記之 大寺新成の和檀越三重塔 先之云

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用

恭敬し　如水公居士ハ宗英公の霊牌を安
置しまつり並ニ三花居近雲居士ニ梅俣院居士法
雲院殿 宗英公の母君なり の霊牌をも同しく安置して各
ともの菩提を奈り追善を追り先年宗英夫人居
雲居士乃三世敬柳川福厳寺ニ於て写さしめ玉
花山梅岳寺ニ於て新たに建て揚昔の安置卍山東林
寺ニ掛錫せしめる際臣言量久世にして伝へて卍山り
精舎に乞ひて年号を改め國元し出る寺にして

開眼の会を供養し奉り自ら其影を再写し
て当寺にも是を揚奉る宝永元年甲申冬夫人勝臣
写田主直を以て二年梅ニ告て円範前國に営祀又近雲
祀父宗英専ら武威を振ひ以乃雁留鏡之梅岳寺と
いふ是福岡にありて萬ゟ当東林寺三花氏の
牌を安し供養ある事して雁留の剣へ其地まろ多く大金
門房州にて近雲の母君参居院殿の会に印許
安房ら鐘を廣く為が構への地こと役をまけて下さ

に正観音の像恵心僧都の作なりあり寿永より伝来しものとぞ
てありし本尊なりしを後に寺は村落となりて本尊のみは
あらざる東林乃院内に一宇の草堂を創建し彼像を
安置し永世に至るまで供養を修せしむべしとて草根
一寺の猿栖なりしを時に辞をしたりといへども再会する事ありけり
時に巴山禅室を請して尚ひて当て、やがて礎を築き幸
に張りて君夫人の建立となし巴山はたゞその草堂
を加へ造る観音安置乃法会を君夫人巴山を請じしめん

とき巴山其讃を感佩し錫を飛して三月十四日
東林に来たり同門一宗数十員乃大衆を引て法要
を修し稱してこの堂に斎饌を備へてのち書し
て唱ふ三面に掲げ又堂中の棟札を書せしめて君夫人
建立供養乃大概を記す此日鎌田昌生は[illegible]君夫
人乃言を傳へて八十三石を以て東林に附して観音
堂亭 此堂亭は崖のほとり居士禅室を排して手生じたるもの しは君夫人に依てしるしの観音を同じく此堂なり
の料として[illegible]付せらるゝ都合五石
供養の料として

五十荒の有司ニ付して寺院二永く其産となる四月
廿九日 郡君綱政公出山の序内の正殿ニ請して面話
し遠来の労をいたはりのみ 嗣君 吉之公閏四月二日東林
廿四日の社主と定り其の礼し座ニ及ひ列社の将の
礼しのみ也ニ申端多きこの故ニ略せ 或ハ東後録
此下行あり 増補續風土記
今按ニ三荒五十日トありし三根法号寶山宗有と云
故者ハ安芸ノ郡鈴田村ニ論居せしか後同郡

ニ葬りしより四十余年の後ニ宝暦のはじめ東林
乃寺内ニ改葬せり其ハ生前逆修（ギャクシュ）の三字を遺せし也
おりし其時棺中ニ銘書の像ありしが新たに一字
乃堂の庭ニ安置せり此時 郡君より銘書ニ而
茶湯料として 那珂郡春吉村ニて田数四反五畝
十六歩を寄附しのへり 元文四年己未八月廿五日荒宛 外ニ一化田四反五十歩六厘五毫
付記 右ハ寺利のの廿五荒之来歴ノ兆六年より一永代
此寄附ニ而今ニ在寺中より永代ニ大出之

報光寺 浄土宗鎮西派

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用

大堂山成善院といふ 博多記には大同山定善院とあり 天正六年京都紫野の僧古渓和尚故ありて博多に遠流あり 古渓和尚配流の事ハ十二巻雑著部に委く見へし 暫寓居して居住せし大同庵とよびし 其后赦免ありて天正十八年に帰京す 此時衆徒報謝のためとて水乃字を續んて此地に堂を営み 火難をのがれしむと云故にや あまり近き人家も今に至り て焼亡せることなしとぞ 又きし火災起らんとする時ハ忽ちにして一人の僧来りて是を防きとゞむとぞ 寺伝に言傳へり 今に至り相續せし古渓の像寺内に安置せり 宝暦の頃に至りて別に一宇を建て寺の内に納之して後像を安んず 安永三甲午年 恵之と云より少林寺二世の住持成誉上人的居に大同庵の舊址たるを以て報光寺を創立して則成誉を以て開山とす 此寺蔵本書にあり 妙音寺の西へかゝり 表口拾八間余又無本に記云 此寺もとは古渓とよびし 後に報光寺と改む 古渓の像を安置せしハ二世三善会とよふ

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用

僧をいふ 此寺をしめ恵慶和尚住しめ比ハ
西北乃方ニ寺門のありしとかや

西方寺 浄土宗鎮西派
智恩院ニ属ス

宝樹山と号す 浄土路町の浄土ニあり此故ニ西方
寺前町と云 開山明原上人と云 僧誉善導寺の開基
聖光上人の弟子也 寛元三年乙卯二月十八日入寂 宝暦癸未
までに五百二十八年になる 現住融誉会ニ至て四十六代をかぞふ 初め本ニ
良屋嘉右衛門ニあり 則今の神屋氏の宅也しと云

観音寺 同宗 西方寺属

大悲山と号す 西方寺の表に添ひて芥屋町にあり
此寺に観音あり 是ハ本尊の化仏としめ 往昔南北に架
たる橋柱扉たりしを以て 是ハ本尊[illegible]再三[illegible]
としたるに 不思議乃霊験あらはれたりしか此柱を刻しに其乃
柱の中ニ梅乃木の生気あるこの柱中女ニ化して示
現したるにより 本尊としても観音三体を彫刻して一体ハ
肥前竹原観音寺の本尊也 一体ハ同国佐賀[illegible]の寺
乃本尊也 今一体ハ即当寺の正観音ニて高サ七寸

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

言の長さ一尺之梅にわ春ハ南都薬師寺の僧にて姓
ハ三尾氏和泉国乃人也神亀三丙寅年　聖武天皇
の勅を奉して太宰府観世音寺に住せり又勅令
ありて諸国の経界を正し定めらる此岸の標識
法ある長岡乃やかるへし此寺表に四十九間半と

海元寺

長昌山と号す始ハ浄言の宗改用ゆ今ハ同じく禅宗
寺石高ハ北側にあり表ハ三十六間五尺八寸あり背ハ

真言宗にて独鈷寺と号し松原の西にありしと云
今は真言宗あり後浄土宗となる開山ハ大蓮社岌山上人
其ハとハいへり長円と云ひし者此寺を建立せし故山号
乃文字を改めしといへる寺に上座堂の星蹟あり之
横岳山乃什物之博多記にいふ三郡山岩屋の岩石落乃
ことあり横岳と境を定めし此界を蹟いふのなりとて真
比より二日市筑前人多くいふ所の寺にて伝へぬ近年
此寺は修経ありて営作せりとなる由寺記に云

寺の開基真誉といふ僧ありしか對州の修善庵に
住せり又此津の人彼島に渡海して居りしか其の庵室
の一軸を所持せり海元寺に檀縁ありけるにより納
真誉に依して其紙寄附せられしと云ふ亦近年宗衣
塔の辺より一の石龕（がん）を堀出す其中に骨壺ありて銘に
白鳳元壬申年と書せり住吉いの或人か葬りし
ものや其姓名を書きしを今宝暦十三癸未年まて一千八
十七年に当れり此寺を始め彼地に葬むれるといふ其己

寺内に葬りしそのかはしるし置る寺に移しおきぬ
其のれるも年號を所見に白鳳は　天武天皇の御宇
にて真誉の死は去生る前の年号なきにやあるへ
にてはあらさるへし

一行寺　同宗

三宝山と号す一向宗の南側にあり表口弐十三間あり
初めは此事目水岸の地にあり今の地に移りしは天正之
後の事なるへし寛永元の比住持故有て会良所勤て

色に染まり且霊宝寺なかりし故仁平の頃書之とも
再建のとき云此寺宝暦六年六月中に焼亡せり同
十三癸未年現住性誉之擅家の勧化ありて新たに
造立せり又当寺に宝珠あり頗る宝玉之

選擇寺 同宗

本願山記に曰と云石碑の中にあり表に於ては開山行誉
覚公和尚天正二年入寂住せし妙覚寺に庵を此寺なり
也大方其尊の事あり正月十二日講会

栄昌庵 同宗

順弘庵 同宗

右二寺片土居町西側にありしを妙覚寺の末之寺
妙覚寺今の太元寺乃北にありし時は境内十坪余にて寺内
にありしか本寺住寺に移りし此両庵は今の所に建
立せり

多福庵 同宗

海上山と号す開山大誉上人と云須賀町下にあり海辺なる

中之房

寿福庵（ジュ） 日宗

東町西側にあり善正寺に属す本寺は安銘言之

万行寺 （今は万行寺前町と云） 真宗 鹿之西 本願寺派

此寺開基浄祐といへる僧正清より十五世と云 もとは
上の僧町に在りしを寛文の比今の祇園町に
移せり 当寺の住職と成りしは十二三才の比上京し
門跡に於て剃髪せしより又代々錦織の一家に居て

長政公の時より国中一派の触頭に命せられ今に至
るまての末寺九十七余箇寺あり 又此寺五代の
領主に隨従あり 寂以て住持役せし法海と云 或は使
僧となりて [illegible] あり 領主の待遇厚しと云 一にも
本願寺顕如上人織田信長公と兵を挙げ及びし時九
州よりも門徒の僧共出てしに 又万行寺の西念と
いひし僧猛なる僧なりしか兵器を取て仕へしとて
陣中に感賞せられ無功なきを賞せられ其後今に当寺に小

陀まり判ぬ体に不及とてらしむ宗門ま改方の筆紙
稲ニ麻竹葦のかし国に充々れハ大体ちらのあらはさと
故ニ矢書を以きえてもそれハ体中より夜ニ触ぬ附
きてしぬ此区書正人きことあらしかいのかれん今ハ
かし武云阿彌陀方とひらしハ此信なるへし
長政云より徳永宗也と偽りし成書云
其表本願寺門徒方手として此諸新門跡
かなは本門跡々直参を致ぬ御へ指下し候

一のねニ云しも
七月廿一日　長政判
徳永宗也

今度至ニ京都へ向ひ本願寺新門跡本
門跡お後にあらそれより天下を治め
候へは　長政様に入会本門跡に成
右様其子書下を遣し候中其年
ましく候へしの
即云々右ニ言に書れた

しめて謹言

八月十二日　　速水宗也

そのゝ谷々中

妙行寺　属東本願寺

当寺は石川町にありいつの比乃開基をや詳ならねと
始めは天台宗にて某上人乃庵道場といひて明應の比大
坂に於て蓮如上人宗の教化盛んになりけれは此時
乃住僧彼地に至り蓮如乃門下に入りしより浄土真
宗の寺となり某上人を開山に妙行寺と号す後某上人乃
字を得りて山号寺号を改め且又九州都て
真宗繁昌せしにより此寺も盛んに真宗となりぬ言て
寛文年中本山より蓮華の寺となり末寺若干あり
上西派の其銘鐘とおきて三度兵乱の為に廃頽（ハイタイ）
し後來乃書記宝物ともに悉く烏有となりぬ其の
事件云々といへる僧の本は肥後国菊池の一族にて本州に
來りて表郡屋郡乃郡会といへる僧と亡ひ今も再

也此寺を以西にして住持となる又三ヶ所の城主原田ヶ
崇の字に良三大炊亮殿西長が末子に言尼と号すと云者
流浪の身となりて当山に来て以参良目弟子として寺
以住僧となし以信者とす其北門跡は信長公と
不和のことありて大坂に籠城の時に信者をとして
籠り一方の軍功ありし信者のことを賞し顕如上人
となりしそのあり其後に博多に住し今に至るの
一堂を立文禄年中秀吉公御朱印を賜りとて本寺に

名護屋に在陣しありし北門跡より下向のことあり
住持に信者して名護屋に来り此時の書を備ふ今
に持ちある天正年中 東照神君東本願寺を
立てしめられし時 故ありて東門跡の下に属して此
故に以前の寺は無くして西派として当寺と順正
寺との二ヶ寺東派となれり

順正寺 同宗属西本願寺

祇園町下ノ西側にあり此寺の住持善了の子教了と

此も同妙行寺の末派也しを一寺に分開し順正寺とて
ありし其後寛文年中二世行之に至て今の地に移
転せり初めは妙行寺と下に東向に建たりしか後に
西向となれり

善正寺 同宗

祇園町下順正寺の東隣にあり表口六間四尺一方行寺
に隣る此寺開山休往と云

覚永寺 同宗

昔は夜須郡栗田村にありしは今魚町北側に移
て万行寺に隣る表口六間四尺開基寺房

西教寺 同宗

恵日山と号す開山正善と云善覚寺町にあり東
本願寺に属す

妙静寺 同宗

一松山と号す竪町南側にあり表口拾弐間弐
五寸此寺の境内に古松ありしか寛永十二年七月

本堂の大風に倒れて今ハなし其のあとに従此
寺の後に一本松と号する寺ハ元妙行寺の跡なる
天正の頃の開基元ハ天台宗なる故西本願寺に属す

光泉寺 時宗派 稱名寺末

神護山と号す土居町下西側にあり故に土居通場
と云所にありしが稱名寺の内に移りしが後に今の所に移
すなりと云此寺に文保年あり

行願寺 天台宗派 正覚寺末

須崎町にあり海雲山菩提院と号す妙音寺乃
開基良頃法下光明寺の建立にして寛永六庚寺の
隠居所也此開山ハ後に筑後北野天満宮の
の宮司となりしが此寺をしめハ清江山といひしを元禄
六年京都知恩院の末寺となり山号を寺号と
改められしと云

本願院 真言宗

一方場新町にあり慶長十六年余にあり東長寺乃

子院之昔ハ樗田の社内にありしと云

成就院　同宗

円輪山と号す円輪天満宮の別当寺にて境内
にあり東長寺に属す

神護寺　同宗

神護山と号す樗田社の北にあり東長寺に属す
寺の内に庚申あり

円水庵

辻の町三石八幡の境内にあり一行寺に属す

真空庵　比丘尼寺

新川端町にあり表は拾石妙楽寺に属す此寺の
手妙音寺の釜下にまつれり今もあるへし

光西寺　禅宗に属 聖福寺

昔堂山と云昔堂町東側にあり表は七百年寺 本尊
弥陀仏の坐像にてむかしの[illegible]に住吉の女あり[illegible]
し世に坐像の信[illegible]のまゝに少寺の[illegible]しとし[illegible]

一寸の重さ九匁ありし也近ほ前後一面の文字し
あるへし云云古き鏡をは此鏡なるへしとて
御領主へ差出し仏前に入置たるへのみにて世に唐
の物なるへしと還云云ありかしと云重さ九長（ヒトナリ）と云所
知富ありていある時彼鏡をこし
或人の云ふは是はよしかのしれうか田のかはとのけなる際
のきはかこの神に祀りしと云其後此鏡を亡母
乃秀とて武寸四郎の墓所并乃像を像をせて凡

乃ちる也又ありあるをありしか何とて此地に此造
三りては此仏の安置せへしと思ふれのいし性改とて
信却士贋置本の郎鏡は本主此地に居し付くるへき
よし鎌倉将軍へ宣下あるよし此湖と申縁ある
古文書に持たへし此鎌倉に持来して許容し
それは程なし二三代と知りでもらし本鏡あとかの下し
文字納りて末代の眉は開きて三所圏しりての際
の三所御中室取りそ海りる海上ナムて蔵（タカムレ）中船（フナバタ）の女も

さしかゝりける時に大なる魚の喰付てはなれず引に引
いまさりしかは彼ちからしらずあとの方になりて又
ふしぎにもりものゝにのしるしありける彼守袋を海中
に落しいまの知足に所持して祝き悲しめとて甲
斐なし夫より子孫繁昌のいはひと祝まつりて一冊の書
御を云ふまに下しめ其て丹誠をこらして祝りけり
又夜石田宮の霊を宮を造立ありける由是は舟出して
長州赤間関にて或夜に同船の人々に語てしめし

とて鏡は我身のはて大なる鏡を割りて彼
伴より彼守袋を持ゆるり知足に大に崇めて備に
岩屋の明神の西の方に之を国家統とし守り程
ありし博多の浦より一寺を草創して本尊をあがめ
今に至る西方寺の其始をいへて詳ならずしかし其霊記にも
七乃巻々にも三十六ありける此寺に今に至て船人の平海路
無難の守り此寺よりける崇めて又今は割に
其始の五年し本尊を云は弘法の作となる

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

作り太宰府の櫨原雲正丘の字を進之

一朝軒

矢倉門にあり鷹居寺之〈鷹居又虚堂の居。梵瑞師。或ハ梵瑞しとも云〉華化

禅師の後に紀師とも云妙安寺西三十三國一庵の居

乃本寺之図にも庵と云乃茶室ありと云瓦前にはまし

へより宗かたの庵也ありかゝりしの近世まで庵といふ者

妙安寺前町に住せり其後露底といふハ乃朝寺の

内に小庵の後凡に住せし其子三郎ト〈素庵露路傳トスヘキ不詳二里ニ居〉

者ありし故切り其後一字庵にも住しめて

今の地に茶室の開き一朝軒と号しても聖福寺

中に庵あり一字て露底子之今の住持ハ一字より

三代目之二字目三里ニ云妙安寺在太佛妙法院内鷹

居之本寺也閣西三十三國鷹居支配叙頭巷與一

休和尚無好於天八白号ニ風云通者到京嵐生鷹

庵弄数曲因号鷹居

大会佛

國俗普賢寺ニ坊主といふ妻帯の僧之寺に住けるか
なりし説経とてもしろくかたりけれは物読かとなく面白く
唱へて糊口(クチモラウ)或ハ二八月の彼岸中ハ五六人もうちつれ
て所々に大数々今まて修行に出る事あり故に大念
佛といふものやありしか林桂といひしハ古門戸町に住して
林長林貞林清傳て今の林長に至るまて妙楽寺町
秋月蔵本門前に住せる福岡にてハ宗像村に同宗の僧
ありしとそ東職人町大長寺の門前なり

附録

崇福寺　臨済宗紫野 大徳寺

横岳崇福寺ハ今那珂郡に属して博多の管根
さる説にあらすもとハ此地の新町にありけるか
くむかしより博多ノ松原乃西北へ移し暫(シバラ)く此
説にあらハしぬ自性房需衣あまたとよみたるなり
続風土記云　四條院仁治元年に居住して以て僧太
宰府横岳に一寺を建立す　其後三年　聖一國師大

宋より帰國し博多に至り崇福寺に住して開堂

説法せしむ聖一の師径山(キンサン)の佛鑑禅師 無準和尚 親書なる

りし勅賜萬年崇福禅寺の扁額を自ら筆して

聖一に与ふる聖一其額を持来り此寺に掲げて寺号と

す 無準この時より勅賜の二字を書し自ら[illegible]紹書す一国に傳ふる 山号ハ[illegible]の名を用て

横岳と云 後嵯峨院寛元元年に勅願所として博多

承天寺と同時に官寺となり西都法皇居して以て勅額を

賜ふ 承天寺ハ仁治三年為和創之 其後暫く東福寺に住持の時居士

より南浦紹明和尚を請して當寺の開山とす南浦ハ

径山虚堂和尚の弟子大徳寺開山大燈國師の師大應

國師也 二十四流宗派図記云筑前横岳開山南浦紹明諡大應國師入宋嗣径山虚堂揚岐十一世而本朝之一流紫野派

妙心寺派倶出大應 亀山院文永四年紹明和尚に勅有て圓通大應

國師の号を賜ふ大應國師此寺に在住せしこと三十三

年なり其後 後二条院嘉元元年に勅命を蒙りて京

都万寿寺に住持し夫よりして建長寺の弟子[illegible]山和

尚に譲りて住持せしむ其後ハ彼法眷一派の長老

かゝるに住持し今に至てハ十二代に及べり此寺昔ハ繁
栄の地にて寺三座ともありし大友宗麟の時に筑前
豊前肥前にて寺百三十四町乃田地を此寺乃三座之外に
天正十四年七月薩摩乃兵此所に屯して三座の伽藍悉く焼亡せし時
此寺も焼亡けれハ兵火に罹りて数多の寺宇悉く
一所遠しとありし故に此所に在る亀山院 後二条院
花園院乃宸翰 勅額綸旨及ひ歴世の書より始
乃御判墨蹟珍器等宝一時に焼失せり其後再

興せる人もなく名のミ残りて年経りしに慶長十年
長政公当国乃主となりてのち大徳寺の春屋国
師此寺再興の事を頼ミ給ふ 長政公もとより春屋に
帰依し参らせしかハ此事を頼ミ給ふ時春屋下
向ありしかとも宜しからさる時ハ其身ハ旬日に及ひて遠
国乃住居成りかたしとて法姪雲英禅師を下さる
長政公宣ひけるハ官府ハ福岡より遠路にして
常に参詣し難し 崇福寺ハ博多の東十里松乃

内に移し其旧跡に立へしとて　今の地に移し給ひけるとそ
る其翌年　雲英和尚は上方にて遷化せし故此寺無住
なりしか春屋乃弟子江月和尚に住せしむ　春屋遷
化して遷化の後は当寺及大徳寺乃内龍光院を
も江月住持せらるへきよし　宣下ありしとそ　当寺の住
持今に於て江月の法孫相続をなして数年をへたり
乃ち堂仏殿乾方丈三門用殿開山堂鐘楼社庫
司察寮浴室書院中庫表侍者庫茶外門内門

廊下ありし　長政公建立なし給ひ其外皆悉く三つ道当
瑞雲菴は博多の豪商神谷宗室建立なり　宗菴
は江月和尚建立也　比住菴は　長政公の家臣久野外記
入道下巨其建立也　元和長政九年に　長政公寺領
三百石宛行しかとも（其後寺産減少し時なりし）　其後開山位牌料五十
石宛行せらる　（今按に開山塔五十石の寺産は当時宗室拝領の内を龍光院へ宛行しなるへし）
今三百五十石の寺産あり　むかし開山南浦和尚檀越
乃住持を招き師は一派の衆をも宣る　一門瑞雲菴二間

園通閣三曰飛瀑岩四曰此君亭五曰長松嶺六曰白
蓮池七曰甘露井八曰霞笠茅藤此八ケ所ハ信樹岳ニハ其地
まりて今此所ニハ宿りしかしこくて旧跡の墓ハ信
乃猿谷方丈乃前ニ揚ありて此寺乃事務信玄三郎信岳
の所ニ志るしたる此寺ニ如水長政先之東市正隆政長政之子
季子なり後東市正之勝忠之之子なり忠之之の夫人養照院
光之之の夫人宝光院の廟墓不得及信得あり是
ゆゑに一世之の國君参拝の礼ある也のゆゑ

今猶ニ右の外綱政公及び其夫人公子公女等の
廟墓及霊屋あり如水公乃碑銘ハ豊州以酊
菴主蘇那和尚之撰長政公の乃碑銘ハ
林道春之撰記なり

四君乃追號 餘ハ略之

從五位勘解由次官孝高
龍光院殿如水圓清大居士
慶長九年甲辰三月廿日
春秋五十九才

長政公ハ當國御領し給ひし時ハ如水公ハ御隠居なり

元祖

前筑前太守従四位下侍従源朝臣
長政始任甲斐守後轉筑前守

興雲院殿古心道卜大居士

元和九年癸亥閏八月四日　春秋五十六歳

第四代

前筑前太守従四位下侍従源朝臣
綱政始任肥前守後轉右衛門佐

霊源院殿因山紹之大居士

正徳元年辛卯六月十八日　春秋五十三才

第五代

前筑前太守従四位下侍従源朝臣
宣政始任和泉守後轉肥前守

泰林院殿義山道祐大居士

延享元年甲子八月十日　春秋六十才

又博多聖福寺住職せし年臘ハ廣く学徒を聚め又江戸東海寺及ひ大徳寺等に三重其院の輪番を勤めし事あり其後ハ将軍家にも拝謁を遂られし事も云へし大鑑和尚にも有又寺領ハ少き住職の間年々捧ケ米弐拾石ツヽ國君より下

し給ふ

自性院 浄土宗

松栄山と号す福岡善應寺の末寺也博多ノ石堂
口より松原に入て左の方にあり 老之云此寺旧鎌田
九郎左衛門持隆の地なりし若故男子出家し名道
寺の才子となりて圓心と号す工夫の修行に遍参
しける折から或は平生に春日乃化人のやうに閻魔
の木像ありし故見て其形前に逆ふ云ふて庵置

延宝八年今の地に移りて寺号を建立し自
性院と号し始閻魔王の像を再興して安置す此
時鎌田氏力を用ひて助成せしと云此頃ハ今ハ
へ寺の寺地なりしとの事

圓福寺 真宗 今西蓮寺

妙楽寺 表町にあり 住持代々相続して福岡の士
三宅藤兵衛の子之孫なり 老之云此寺昔ハ小本
禄七百石を給ひて黒田山城息男大夫の所にあり

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

一寛永九年故有て大膳亮国家の三臣退去し内
豊之丞と云者後に隠居其外を切腹せしめらる
作翁其時は御出家の事なりしかハ一族の中を赦されより
上より御赦されて一命を免されハ法常寺の当喰坊
主となされへしと其後許あり其后表糟屋郡和田
村法興寺に住して其後桂翁と号し此寺に出家
となりて圓福寺を開く開基を然るに元禄の比より廃
寺となりて今ハ人家乃跡尾村民の跡にありしとそ

又其后宝永年中那珂郡平尾村法興寺の旧跡と
以て僧了珍法興寺を改めて聖福寺と号して
聖福寺ハ直末の寺なれハなり

洞松院

昔ハ聖福寺と云り対馬小路町下にありし西福寺赤嶋
坊快眼と云僧大義寺の住持となりしか其後
隠居して此寺に移り洞松院とあらためしか其名は
とそ元禄の比より二ヶ寺となれり

古墳

濡衣

續風土記云　聖武天皇の御時佐野近世といふ人筑
前の守に下りし京より具しける妻は國にて死
せり其後國にある女を妻としけり先の妻のうめる
娘を継母まことにいかにもして此娘をうしなはん
と思ひ海人をかたらひていひて此娘夜々来りて我へき
せしは京乃娘君乃此月ころより衣をぬすみし人は
釣衣をぬきもちてかへしけるはたゝ人ならぬ事の由
をうつたへける海人来りていひしか如くなりけるを
見るにその夜父大に怒りて急ぎゆきて見れは娘
ぬれたる衣を引かつきて寝たりけるに娘の寝たる
に継母の云ひけるにかはらす父やかて娘を
ば殺してける娘か殺されける此次の年娘父の夢
に立て二首の歌を詠しける父夢覚めて娘か罪なき
を知り継母の偽りを知りて妻を追ひ出し

其身ハ出家して肥前松浦山ニ住ミ世ニ松浦上
人とそいひける夫ましてわきまへなくおもひけるにやぬれ
衣きせられしを路へそうつまこと傳る其旅の墓ハ昔
ハ聖福寺西門のかたはらに在しか近き世まて移
して今ハ石堂松原乃西の橋際博多の東石堂
ハの川乃東のかたはらに此地の内にあり大なる石塔
しるし有文乃字ハ見へし旅乃ことわりぬる歌

ぬきゝするその名はかりの濡衣ハかの
きぬきぬのなるもしかりける

ぬきて衣の袖よりほしに涙こそかきなかし
流すゝめしかりける濡衣ハはあの後人乃言多う
されといつれの代にしるされたるにやそ
今博多ニ本州船頭(センドウ)舵取(カシラ)吉田三郎の着る江
海風帆草子にあるものハ濡衣記の詞にすこしく異
なり云濡衣といふ事ハ昔筑前なる守の定めん
とぞ人の娘を継母の讒言にて唯の濡

衣をかりて女の閨のしつかりける娘しけに
来りしに我か釣衣をとらかせたる海人来りて
娘ごの衣か衣をぬきかへせのはし侍てさしおき
佐衣ひろへにおきなをいひはなり釣漁人の手
おきには父とてをわけせのはへ見えけれとて娘を
てこのくぎ桜しけりて長かお娘父の墓にて月
一首
ぬきゝするそのなもふりしのめぬれ衣を

かこのきみのなくなしかりけりしに父あはれとさあし
しほしく思へは霜とぬぬ衣をはあはれと父とゝ
あやなくかりけれは又乃夜
ぬれ衣の袖よりあまる声こそなき
名をなかす例なりけりかくめりふれは父なけき
母をもうしなひ娘乃せ侘善に也て博多の七年
をつきしるてひ夫よりおきくなかひけるとを
佐のぬれ衣とは七年此所に建しとは

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

はやしなれといひ傳へ侍れハ記にも見えて又梅
一条禅閤乃号桃花叟北村季吟の古秘抄諸
抄長頭丸の説とも唐衣乃そなれしき出所
こへぬよし侍り此事ハさいつころの詩説なりしかの
しるまゝそのよかりけるのこゝをきしをや〇近年
福岡の商人聖福寺寺中町口の石橋に 聖福寺十境の内
通稱橋名 日記なり はるゝき倒れしのち後善の者あり
こゝに新橋を架し直しこれに天余乃詠ある石に

梵字あり記の名儒衣乃古吟頌なりとて名
石の様には本文乃説とを合せ見るへし 一説ハ佐野近
世の銘ハ今乃唐口町の四ツ辻にありしとそ石の畫

大明玉盛光明墓

一 小路町上西側料亭の後園にあり寛永年中ニ
奴菜園の穿ちし一の碑石を得られ其銘に

大明國使従仕郎
山西行省都事

允明盧公之墓

右の十九字あり年月日ハなきなり石ハ高さ
二尺八九寸横下にて二尺四寸上にて八寸ばかりの厚さ
四寸程曽て福州の儒官及び長崎辺の識者に
尋ね侍りしかど明書の中にも此人の姓名見え
ずといへるよしいで抑此ハ足利義満公の時ハ大明太
祖皇帝と為し使節の往復ありしが洞史稀にて
言へ侍れハ此人も其の来朝せし人なるべし嗚呼盧氏
君命を奉じて我国の東海に渡りし不幸にして
此岸に命を殞し終に古郷の空を見ざる事なり寄の
異郷に此世の神となりける依託せんや国を四
方の文をなせる詩文一篇を求めて一冊となし
祭奠の事ハいかで作りぬ彼霊をなしその事ある
あらハすに寸悃を郷饗作らしめし

宋人謝国明之墓

此堂化出町に出て宗寺の庵の跡の他の例にあり

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4
ガラス使用

其のち上に大なる楠木生ずるが、是は承天禅寺の庭に在せし
宋國の商人也、此故に承天寺の境内なりしなるべし

秀海之墓

續風土記云、いにしへ此川の畔にありける安居院秀廉
といふ者の末、博多一番乗の東なる濱にて七日の法会
行ひて後、船に乗て補陀落に向ふと称し大洋に
出しを、其後行方なし、故に此所を千部の名を入海
多三町乃名を入道船と云、今も其後の墓あるとぞ

松が植し墳、村の川邊にあり、古木の松多く其若松の下に在
二株乃松ありしが、今は枯れきぬ

明月之墓

寛文の比のとよ、万行寺いまだ三ヶ所町にありし時（町東側と祇園町北側との間に墓所ありしといふ）櫛田前町茶屋の名月といへる遊女
深く佛に帰依しけるが、その毎物の時に同寺
に詣でけるが、年々経て老いて後、万行寺に葬
りけるに、或時其墓より白蓮生して花咲開きけり

代々箱崎之下両寺中よりほしくゐろるを其多くの

ありしとぞ　博多記

石城志十二　終

鶴田藏書

特1001 4

国立国会図書館　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用

国立国会図書館　　石城志 12巻　特1001-4

ガラス使用